

「泌尿器科診療に役立つ雑誌」

絹川 常郎

1. はじめに

日常診療に追われる一泌尿器科医として、数ある泌尿器科関連の雑誌からひとつずつ正確な評価を行い、これを読者に伝えるには私が適当な人物とは思えないので辞退したかったが、結局引き受けることとなった。書くにあたって自分に納得させたことは、格好をつけず、自分が自分の領域の知識水準を保つために最低限目を通して、または目を通すべきと考えている雑誌を紹介するとともに、この際、最近の市中病院の医師がどのような経路で情報を入手し活用しているかを紹介すれば十分であろうと考えた。

2. 泌尿器科一般領域の英文誌

「JU」、我々泌尿器科医の間でこう呼ぶ「Journal of Urology」は筆者も末席に加えていただいたアメリカ泌尿器科学会の学会誌でもあるが、世界中から優れた泌尿器科関連の論文が投稿され、一冊だけ選ぶとしたらすべての泌尿器科医はこの雑誌を選択するであろう。泌尿器科関連すべての subspecialty をカバーしている雑誌である。泌尿器科医が医局や病院で抄読会を開くとき、まずこの雑誌が選ばれる。筆者は、全領域をカバーする英文誌ではJU以外に「Urology」と「British Journal of Urology」が重要と考えているが、実際には毎月、送られてくるJUの目次に目を通して幾つかの abstract を読み、

本文を読むのはほんの数編というのが実状である。他に、1994年から日本泌尿器科学会も英文誌を「International Journal of Urology」として出版している。これについては我々がもり立てて行かねばならない。

3. 泌尿器科医にとっての専門領域の英文誌とこれを補う一般誌、データベース

私の泌尿器科医としての subspecialty は、腎移植、エンドウロロジー（泌尿器科関連の新しい内視鏡治療などを中心に扱う領域）、そして泌尿器悪性腫瘍である。腎移植については最も重要な雑誌は「Transplantation」と「Transplantation Proceedings」である。

この2つが学会の公認雑誌とも言うべきものである。「Transplantation Proceedings」は最近、世界中で開催される規模の小さな研究会レベルの学会やひとつの国の学会記録も掲載されるため、雑誌のボリュームの割に引用される機会が減り Impact Factor が低下しつつあるが、TOTAL CITES の数は、Impact Factor のより高い「Clinical transplantation」や「Transplant International」を遙かに上回っている。2年に1回は審査の厳しい国際移植学会の全発表論文が掲載されるので、筆者は、移植の推移を知るためにこの特集号だけは、1978年の学会（シクロスポリンの最初の発表があった）の分から2年おきに、いつでも取りだせるよう自分の書庫に保存してある。移植については、重要な論文が「The Lancet」や「New England J of Medicine」

に掲載されることがあるので、図書室へ行く
と目次にだけは目を通すようにしている。古
くはオックスフォードからの、当時画期的で
あったシクロスポリンの最初の臨床成績、最
近ではシクロスポリンとタクロリムスのアメ
リカとヨーロッパでの randomized study が、
これらの雑誌に掲載された。

エンドウロロジーについてはまだ新しい領
域であり、「Endourology and ESWL」という
雑誌があるがこれはその道の専門家のための
雑誌であり、この分野の最も重要な論文は
「Journal of Urology」に掲載されているの
が現状である。英文誌という意味では、日本
endourology ESWL 学会の機関誌「Japanese
Journal of Endourology and ESWL」も約10
年間、英文誌を年2~4回発行してきたが、最
近は若い医師が読みやすく投稿しやすくする
ために、一部日本語化されてしまったので寂
しい思いがする。

癌関連ではJ U以外に「Cancer」や「Can-
cer Research」に泌尿器科関係の論文がない
か目を通すようにしている。アメリカでは前
立腺癌が男性で最も頻度の高い癌であること
などから「Prostate」という雑誌にも前立腺
癌の重要な論文が掲載されることがある。雑
誌ではないが、癌についてはアメリカ国立がん
研究所(NCI)から出されるPDQ(physician's
data query) ファイルはアメリカでの癌の治
療指針であり、最新の情報を十分吟味した上
で取り入れ、完成度を上げるためかなり頻回
に書き換えられている。これを知った1992年
当時は、ニフティーサーブの INFOCUE 経由
でアメリカの有料データベースからダウン
ロードしていたが、今ではインターネットから
無料で容易に最新のデータベースを入手で
きる。日本では国立がんセンターのホーム
ページ ([http://www.info.ncc.go.jp/0sj/
indexj.html](http://www.info.ncc.go.jp/0sj/indexj.html)) から入手するのがわかりやす
い。ただ、最近の傾向として、ひとつの癌に
関する記載のボリュームが増えすぎて簡単
には目を通しにくくなったことが気になる。要
領としてはダウンロードしたデータはファ

イルを印刷などせず、テキストファイルとして
そのまま自分のコンピュータに保存し、必要
に応じてワープロやエディターの検索機能
を使用しながら必要な項目を読むのがスマ
ートなやり方であろう。このような読み方は、紙
の雑誌では絶対不可能な方法である。

泌尿器科のその他の subspecialty として
ウロダイナミクス、小児泌尿器科、男性不
妊、尿路感染などがある。筆者はこの領域で
はあまり学会活動をしておらずこの領域に特
化した重要な雑誌がどれかあまりよく知らない
ので、この領域を専門とする医師から得た
情報をもとにして簡単に触れるのみとする。
ひとつだけ挙げるなら、ウロダイナミクス
では「Neurourology and Urodynamics」、小
児泌尿器では「Pediatric Surgery」、男性不
妊に関しては「Fertility and Sterility」
が重要な雑誌だそうである。他に、毎回特集
中心のやや特異な存在の「Urologic Clinics
of North America」も興味のある特集は後で
よくコピーを入手する雑誌である。

以上が私なりに選んだ、泌尿器科関連の
オーソドックスな英文誌に関する情報である。
泌尿器科というあまり守備範囲の狭くない領
域なので、ここに挙げた「Lancet」や「New
Engl J Med」を除くと Impact Factor があ
る程度高い雑誌は「Journal of Urology」や
「Urology」、「Transplantation」のみで、
あとはあまり高いものではないので、恒例の
Impact Factor は一部の雑誌に限って表に掲
載しておく。

4. 和文誌の役割

日本の雑誌は学会誌やそれに準ずる雑誌
(私の場合日本泌尿器科学会誌、泌尿器科紀
要、移植、癌治療学会誌、腎臓学会誌など)
は、特集などは少なく、どうしても博士論文
用などの基礎研究に関するものが多くなり、
臨床に役立つ雑誌の概念からは離れてしま
う傾向があるのは否めない。むしろ、日本語
の雑誌は自分の専門領域から少し離れた領
域に関してまとまった知識を至急手に入れたい時

に、その目的の特集があるとありがたい。従って、泌尿器科医にとってもその観点から見ると雑誌の範囲は少し広がる。私があるテーマで特集号を探した結果行き着いた雑誌は、ほとんどが商業誌であるが、この1年では、「最新医学」「腎と透析」「医学のあゆみ」「臨床免疫」などであり、次の1年では全く異なる雑誌にお世話になるかもしれない。

5. インターネット等の活用

これ以降、全くの独断で思ったことを書かせてもらう。癌の治療指針でも述べた通り、いまや、必要な情報はインターネットで何でも手に入ると錯覚するような時代である。私の例で言うと、講演などでアメリカの最近の腎移植の成績が必要となったとしたら以前はそのデータの載っているような本や雑誌をいくつも繰ったものであるが、現在では UNOS (United Network for Organ Sharing) のホームページからどの雑誌にもない最新のデータが入手できる。ある日突然、自分の curriculum vitae を提出することが必要となり bibliography の更新がしてなかったのであわてたが、何のことはない。インターネット上の Medline から自分の名前を検索してそれをファイルに落としてちょっと手直しただけで完成した。

あるテーマについてまとまった知識を得る必要がでてきた場合、昔ならそのテーマに関する論文の掲載されるような雑誌で過去1年間ぐらいの中からできるだけ新しい論文を探し当て、あとは孫引きしてゆくという手法を取っていた。しかし、これで得た関連論文をやっとの思いで入手すると予想と異なっていることもしばしばであった。図書室にどの病院でも Medline の CD-ROM が設置されるようになってこの環境は激変した。しかし、一人で長時間占拠する訳にもいかず、abstract を片っ端から印刷するとこれも結構な量になる。仕方なく、abstract をフロッピーに収まる範囲でダウンロードして自分のコンピュータで読む。そのために、もう一度デー

タベースを再構築するためのツールを自分でプログラミングしたりもした。最近は、多少スピードは落ちるが、もっぱら、free の Medline を自分のパソコンからアクセスしている。Abstract を見て必要な論文を絞り込み、後は病院の図書室で手元にある雑誌をコピーし、見つからないものについては、司書の方をお願いして外部から入手している。これが私の最近の医学雑誌を通した典型的な情報の入手方法である。

これらの例はいわば能動的な情報収集であるが、受動的な情報の流入も増加しつつある。エイズ薬害問題以来、厚生省発院内薬局経由と製薬会社から薬の副作用に関しても、とても目を通せない量の情報が流れてくる。受動的な情報は印刷物の形で入ってくるが、その時点で興味を引く情報は多くはない。とにかく全部伝えておくという姿勢だから生半可な量ではない。机の上にはしばらく積まれやがてゴミ箱へ消えていく。重要度別にグレードをつけ、しかもその薬剤を使用する可能性のある医師に専門領域別の情報提供はできないのだろうか。そして、やはりいつどこからでもアクセスでき、色々なアプローチ方法で検索できるようなデータベースを早急に確立してほしいものである。

6. 今後の医学雑誌の方向

さて、このような情報の氾濫した世の中で、果たして従来からの紙の雑誌の意味は何であろう。私にとっては、2から3の固定した雑誌で、厳しい審査を通して掲載された一流誌の論文を通して、自分の領域における最先端の方向性をつかみ、一方で自分の周辺領域の知識不足を私にとってはずっと読みやすい日本語の特集である程度のレベルに保っていくという、2つの意味であろうか。あとは、今示したようにインターネットを通しての情報収集となってしまう。いずれ、個人のインターネット接続者の比率が高まり、料金の徴収方法が確立すれば、雑誌への投稿論文も雑誌への掲載と同時にインターネット上に公開

されるであろう。掲載を拒否された論文が個人のホームページで公開され、これが役立つ情報でありさらに質問を受け付けるとしたら、一流誌もただ質の維持だけでなく、ネット上でのディスカッションの場の提供や、一定期間を経た雑誌の無料公開などのサービスを余儀なくされるであろう。

このような時代になれば、司書の方々の仕事の内容は、ネット上で日々変化する情報を我々医師に伝えていただいたり、情報機器の使用に抵抗感を示す医師に、新しいシステム

の使用方法を伝授するようなことが重要な役割となってこよう。

7. おわりに

情報化時代の医学雑誌の役割について書きながら、現在私の部屋は自宅も病院も、医師になってから購読した雑誌が捨てきれずに山積みになっている。医学雑誌に関してこんな格好をつけた意見を吐いてしまったからにはやはり寂しいが、ごく重要なもの以外さっさとゴミに出すしかなさそうだ。

今回紹介した、泌尿器科・腎移植分野にとって重要な雑誌の Impact Factor

	1996 Total Cites	Impact Factor	Immed. Index	1996 Articles	Cited Half-Life
Journal of Urology	26622	2.668	0.461	883	6.4
Urology	5466	2.260	0.204	388	4.8
British Journal of Urology	5277	1.005	0.147	448	7.2
Urologic Clinics of North America	1963	1.845	0.036	55	6.1
Transplantation	18745	3.544	0.356	708	4.9
Transplantation Proceedings	12854	0.850	0.066	1537	5.3
Clinical Transplantation	1044	1.682	0.124	121	4.6
Transplant International	697	1.522	0.183	82	3.7
Journal of Endourology	533	0.822	0.021	95	3.9
Journal of Pediatric Surgery	6155	1.062	0.092	402	7.4
Neurourology and Urodynamics	893	2.122	0.310	42	6.2
Prostate	2252	2.552	0.333	126	5.9
Cancer	47014	3.296	0.368	677	9.0
Cancer Research	82343	8.958	0.982	946	5.4
New England Journal of Medicine	118106	24.834	5.909	406	6.5
Lancet	100526	17.948	4.742	532	6.5

出典『Journal of Citation Report® 1998』